

ニカラグアで東日本大震災を記憶する

東日本大震災から9ヶ月が過ぎた。日本ではその記憶と痛みがまだ生々しいことであろう。ニカラグアでは、大震災発生直後、仕事の関係者はもとより一般の住民の方々からもたくさんの温かい言葉をかけてもらった。熱しやすく冷めやすいラテン気質の人たちの国であるからもう滅多に話題に上らなくなったが、首都マナグアにある鍼灸学校の受付の横には、今も当時の新聞記事や写真が掲示されている。

東京出身の移住者が運営するこの鍼灸学校は、大震災直後、診療所やショッピングセンターなどで募金活動をし、寄金を日赤を通じて被災地に贈った。有名なホテルの併設施設であるショッピングセンターで鍼灸のデモンストレーションを催した際に、無料マッサージを提供し、かたわらに義援金箱を設置した。この施設の規定では、敷地内の募金活動は禁じられていたが、アジアでの災害という配慮から、台湾人の



総支配人が募金活動を許可した上、無料で会場を提供してくれた。彼女の特別の配慮は今もありがたく思う。そして、地震やハリケーンなど災害の多いこの国で、あの大震災を忘れさせまい、風化させまいとしている鍼灸学校には敬意を表したい。(福岡 正行)

“アールディーアイ通信 No. 56/2011”から

写真: 震災を忘れない、風化させない

マナグア 2011年

旅立ちはパーシーで

ラオスでは結婚式などの祝い事や壮行の集いなどのたびにパーシーという儀式を行ない、その時に必ず仏塔を模した飾りをつくる。白い木綿糸を束ね、バナナの葉っぱを四角く切って表面をきれいにしておなじサイズにしたものを円錐状に巻いて形を整え、マリーゴールドと一緒に飾り付ける。花はだいたいオレンジ色のマリーゴールドを使う。これはお坊さんの袈裟の色で、そのあたりでつながりを持たせているようだ。仏塔を模した飾りに、お坊さんやお坊さんに代わる人が祈りを捧げてから木綿糸を取り、主役となる人の手首に結びつけるパーシーの中心ともいえる部分の儀式が始まる。

私たちがプロジェクトを終えて帰国する時にも、感謝の気持ちと帰路ご無事という思いをこめて、言葉にもして、手首に巻いて結んでくれた。結ばれた糸は取れるまでずっとつけていると言われたが、ずっとはつらいので何とか3日間はそのまましていた。入浴で濡れ湯きを繰り返しているうちにだんだんゆるくなって、ほどけてしまうことはあったが、全部は取れなかった。乾季はすぐに乾くが、雨期はジュークジュークして気になる。シンプルな白い木綿糸のほかに、ミサンガのように色とりどりに編んだものもある。(清治 有) “アールディーアイ通信 No. 55/2011”から



写真: お祈りを捧げる時はお供え物が並ぶ

ラオス ビエンチャン 2011年

秘境セピック川のカヌー

パプアニューギニアの北西部を北東方向へ流れてビズマーク海に注ぐセピック川の流域は、無人のジャングルや広大な湿地帯で陸路の整備が進んでいない。河口から120キロメートルほどのパグウィ村までは川から離れた陸路を行けるが、それより上流はカヌーや小船が重要な交通手段となる。氾濫が多い川で、溢れるたびに蛇行が変わるそうであるが、穏やかな流れのときは水面が鏡のようにさえ見える。

稲作振興の普及業務で、パグウィまでトラック、そこからモーターボートを使って1時間半ほど遡った村を訪ねた。途中合流する支流が無数にあり、パプア人の見事な船外機さばきで迷い込むことなく無事目的地に到着できた。淀んだ支流の浮草の下によくワニが潜んでいるらしい。この流域には、固有の信仰・風習が今でも色濃く残っている。たとえば、霊が川、木、地、ワニなどに宿ると考える精霊信仰から、男はその



写真: 日没の頃、家路へとパドルを漕ぐ

イーストセピック州 パグウィ村 2006年

力を得たいと考えるという。この地方の男は20～25歳の間に、成人男子の証として肩から背中にかけて皮膚にカミソリでワニを描く。切傷が治る過程で皮膚が盛り上がり鱗状のワニの模様が残る。カヌーを漕ぐそんな裸の背は確かに力強い。(濱中 透)

“アールディーアイ通信 No. 54/2011”から

牛の糞は大切に

ネパールの人口の8割を越すヒンズー教徒にとって牛は崇拝の対象であり、牛の肉を食用に供することはない。しかし、牝牛を運搬や農耕に用い、牝牛の乳を食用にする。また、乾燥させた牛の糞は肥料や燃料にするほか、家の壁部分に塗りつけて建築資材に使う。湿ったままの糞で床磨きをすることもある。乾くとそれほど臭いはなく、塗り方が巧みであれば土壁と変わらない。磨いた後の床は黒光りして、それなりにきれいになる。燃料用にはしっかり固めて乾燥させてから使う。結構火力が強く、薪を容易には得られない地域の格好の燃料である。

バイオガス源にも使われる。束縛の少ない牛が道のあちらこちらで草を食んだり、ぼんやりしていて、当



写真: 素手で糞を運ぶ女性

ネパール バラトポカリ 2010年

然道端のそこそこに糞が残される。それを誰でも集めにきて家に持ち帰るから道端にいつまでも残ってはいない。自転車で集めて回る人もいる。バイオガス利用の啓発活動と生成装置の設置には NGO の支援が入っているようで、森林保全のため、燃料を薪炭からバイオガスに切り替えるよう活動をしている。人々の暮らしにとって大切な資源である牛糞は、何に使うにも素手で大切に扱われる。(川畑 享子)

“アールディーアイ通信 No. 53/2011”から

物資を運ぶ

ネパールは東西に長い国土を、南側のインドと北側の中国に挟まれています。南北の幅が狭いところで200 km程度しかありませんが、地勢が多様で南部から、インドと国境を接し夏季には気温が40度を超す標高の低い地域、気候は温暖ながら急峻な傾斜地が入り組む中部山間地域、8000m級のヒマラヤ山系を後背にもつ北部山岳地域というように変化します。中部以北の町からは高山の眺望が眼前に迫ってきます。登山やトレッキングを楽しむ外国人旅行者が多く訪れる世界的な観光地が多く、標高3500mほどのところまでよく整備された山小屋がたくさんあります。山は陰しく、町から車では行けないところに物資を運ぶにはポーターが活躍します。おそらく50~60キログラムはあるだろう荷物を、肩で担ぐのではなく、頭に吊るようにして運びます。建築資材を運んでいるところを見ることもあります。何日間かトレッキングをする時は、



写真:ヒマラヤ山脈の山群の1つアンナプルナ山群北部の登山道

ネパール 2010年

同行するガイドが知り合いのポーターを頼む仕組みになっていて、重要な職種のひとつです。エベレスト登山で登山家に雇われるシェルパは地元のシェルパ族ですが、ポーターは特定の部族ではありません。
(川畑 享子) “アールディーアイ通信 No. 52/2011”から

シャーガス病の啓発活動

青年海外協力隊員によるパナマでのシャーガス病対策活動を紹介する。

シャーガス病は、サシガメという2センチメートルくらいの虫が媒介する。中南米に多く生息し、パナマにも多いがそのうち特に2種のサシガメが媒介する。被害状況のデータが乏しい上、この感染症がほとんど認知されておらず、予防のために農村部で啓発活動が行なわれている。サシガメを見つけた場合は、保健所へ持っていきよう指導している。そこから研究所に持ち込まれ、原虫の有無を調べる。

サシガメは人を刺す時に排便し、糞中の原虫から感染するが、刺された時に片目がひどく腫上がる場合もある。感染すると5~20年で臓器、特に心臓が肥大していく。この感染症の恐ろしさは、刺されてすぐに感染を見きわめるのが困難で、そうとわからずに年月が経ってから心臓麻痺などを起こすことである。



写真:サシガメの模型を使い、学校を巡ってサシガメとシャーガス病について理解を求める青年海外協力隊員。

ベラグアス県、パナマ 2009年

多くの場合は死因を調べないので、シャーガス病とはわからずに亡くなっていく。パナマでは、マラリアやデング熱の方が深刻で、大発生するとシャーガス病担当者はほとんどがその対応に回ってしまう。今後もこの病気の恐ろしさを住民たちに広く伝える活動が続くことを願っている。
(攪上 正彦) “アールディーアイ通信 No. 51/2011”から